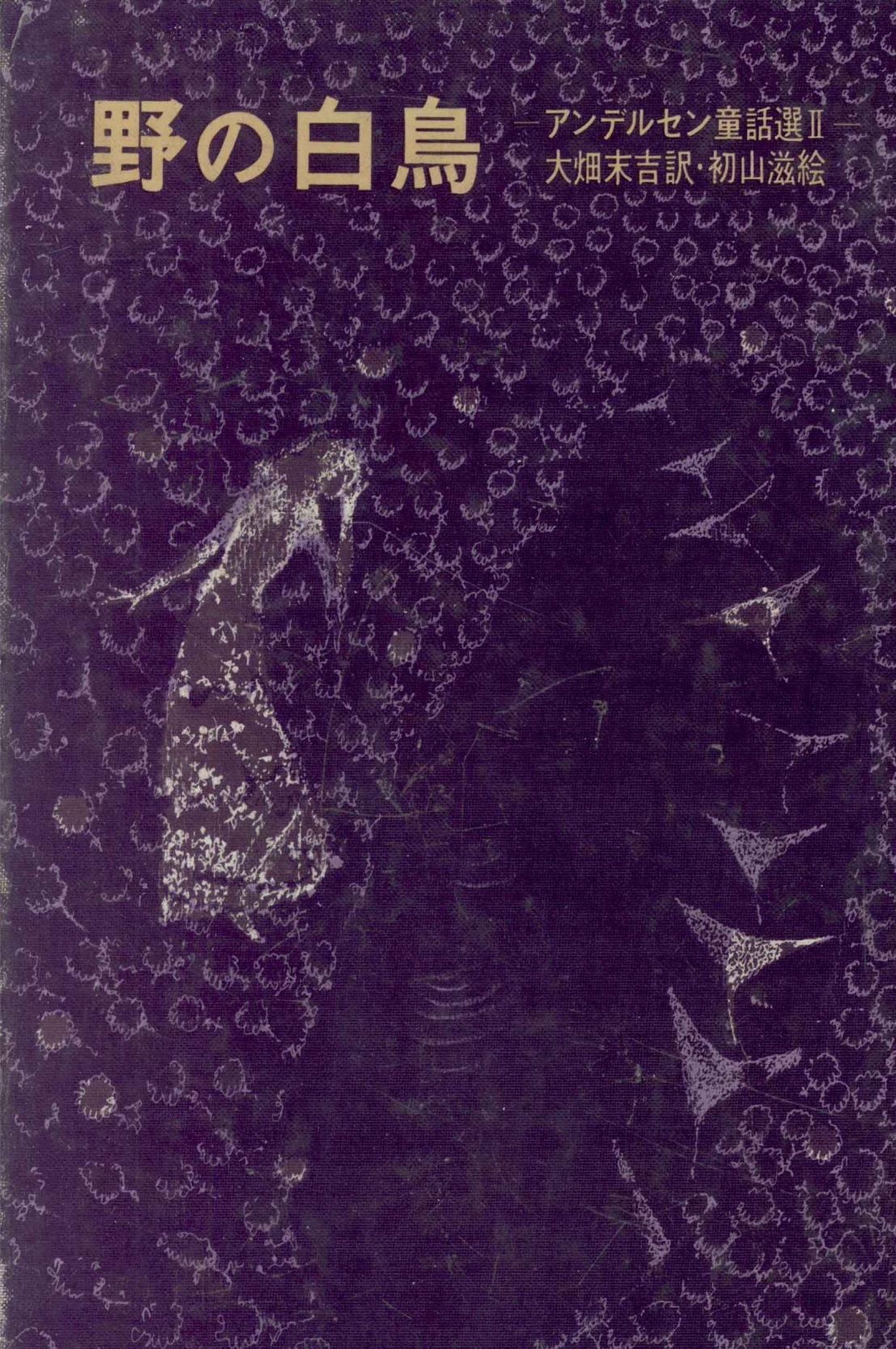


野の白鳥

— アンデルセン童話選Ⅱ —

大畑末吉訳・初山滋絵



940 アンデルセン

野の白鳥 — アンデルセン童話選Ⅱ —

アンデルセン作 大畑末吉訳

岩波書店 1967

274p 23cm 小学3～4年以上

(参考) Andersen, H. C. : Eventyr og Historier,
1837～71.

野の白鳥

— アンデルセン童話選Ⅱ —

定価五〇〇円

一九六七年十一月二十二日 第一刷発行 ©

訳者 大畑末吉

絵 初山 滋

発行者 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

岩波雄二郎

印刷者 長野市中御所二ノ三〇 田中忠

発行所 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

株式会社岩波書店

本文印刷 大日本法令印刷株式会社

製本 株式会社三水舎

表紙・箱・口絵・見返印刷 錦印刷株式会社

野の白鳥 —アンデルセン童話選Ⅱ—

大畑末吉訳 初山滋絵 岩波書店



も
く
じ



鐘 かね	古 ふる い家 いえ	赤いくつ	びんの首 くび	ある母親 ははおや の物語 ものがたり	銀 ぎん 貨 か	マツチ売 う りの少女 しょうじょ	野 の の白鳥 はくちょう	ナイチンゲール	ヒナギク
.....									
140	125	112	94	82	72	66	37	17	9



年の話 ^{とし はなし}	151
さやかからとび出 ^で た五つのエンドウ豆 ^{まめ}	167
「あの女はろくでなし」.....	175
ロウソク.....	191
とうさんのすることはいつもよし.....	197
雪 ^{ゆき} の女王 ^{じよおう}	208
アンデルセン童話 ^{どうわ} について.....	267

野^の
の
白^{はく}鳥^{ちょう}

— アンデルセン童話選^{どうわせん} II —



ヒナギク

さあ、これからお話をしてあげましょう！——
 いなかの道ばたに、一けんのお屋敷がありましたよ。そういうお屋敷を、あなたも、きつと、見たことがあるでしょう。

お屋敷の前には、花のさいている小さな庭と、色をぬったさくがありますね。すぐそばのみその上に、一本の小さなヒナギクがきれいなみどりの草のなかに、はえていました。お日さまは、庭の中に咲いている大きなりっぱな花にも、このヒナギクの上にも、同じようにあたたかにかるくかがやいていました。そのため、ヒナギクは刻々大きくなっていききました。

ある朝、ヒナギクはかがやくばかりに白い花びらを、まんなかの黄いろい小さいお日さまを中心に、後光のようにかこんで、すっかりひらきました。

ヒナギクは、草のなかのじぶんなんか、目をとめてくれる人はいないだろうとか、じぶんは、だれにもあいてにされないうまい花だとか、そういうことを考えたことはありませんでした。それどころか、いか

にもたのしげに、あたたかいお日さまのほうを、あおいで見たたり、また、空でさえずっといるヒバリの歌をきいたりしていました。

小さいヒナギクは、まるで大きなお祭りの日でもあるように、幸福でした。でも、その日はじつは月曜日だったのです。子どもたちはみな学校にいていました。みんなが学校の腰かけにすわって、勉強しているあいだ、ヒナギクの花も、小さいみどりの茎の上にすわって、あたたかいお日さまや、まわりのすべてのものから、神さまのおめぐみの深いことをまなでいました。そして、じぶんがひそかに感じていることを、小さいヒバリがはつきり美しくうたってくれるのを、とてもありがたく思っていました。そして、うたったり飛んだりすることのできる、このしあわせな鳥を、一種尊敬の気もちで見あげました。けれども、じぶんができないからといって、悲しいなどとはすこしも思いませんでした。

「わたしは目も見えるし、耳もきこえるじゃないの。」と、ヒナギクは考えました。「お日さまは、わたしを照らしてくださるし、風はわたしにキスしてくれるわ。ああ、ほんとうにわたしは、めぐまれているんだわ！」

さくの内がわには、かたくるしく上品ぶった花がたくさん咲いていました。かおりのすくない花ほど、つんとそりかえっていました。シャクシャクは、バラの花よりも大きいので、ふくれあがっていました。けれども、大きければそれでいいというわけのものではありませんよね。チューリップは、なかでもいちばんきれいな色をしていました。じぶんでも、それを知っていて、もっと人目につくようにと、まっすぐに立つ

ていました。さくのとにいるわかいヒナギクなんかには、見^みむきもしませんでした。

けれども、ヒナギクのほうでは、それだけみんなのほうをよく見^みながら考^{かん}えました。

「まあ、なんて豊^{ゆた}かな、きれいな花でしょう。そうだね、あのすばらしい鳥^{とり}も、たぶん、あそこへおりてきてあの花たちを訪^{ほう}問^{もん}するのだわ。わたしが、こんなに近^{ちか}いところに立^たっていらるなんてありがたいわ！だって、こんなすばらしいものが見^みられるんですもの！」

こんなことを考^{かん}えているさいちゆうに、「キルレヴィット！」と、さえずりながら、ヒバリが飛^とんできました。

ところが、シャクヤクやチューリップのところへではないんですよ。そうではなくて、草^{くさ}のなかのまずしいヒナギクのところだったのです。ヒナギクはただもうあまりのうれしさに、きもをつぶして、なにがなにやら、もう夢^{むちゆう}中でした。

小鳥^{ことり}はヒナギクのまわりをおどりながら、うたいました。

「ほんとうに、なんてやわらかい草^{くさ}だろう！　ごらん、なんてかわいい花だろう！　心^{こころ}には金^{きん}が、着^き物^{もの}には銀^{ぎん}が光^{ひか}っている！」

なるほど、ヒナギクの花のなかの黄^きいろいぼ^ちが、金^{きん}のように見^みえてきました。そして、まわりの小さい花びらは白くかがやくばかりでした。

小さいヒナギクはそんなにも幸^{こう}福^{ふく}だったのです。それはだれもいいあらわすことができないくらいでした。



ヒバリは、くちばしでキスをし、歌をうた
つてくれました。そしてまた、青空へあが
つていきました。ヒナギクが、ようやくわ
れにかえるまでには、たっぶり十五分はか
かりました。ヒナギクは、いくらか恥ずか
しそうに、でも、心から楽しそうに、庭の
中の花のほうを見ました。

みんなは、もちろん、ヒナギクにあたえ
られた名誉と幸福とを見ていたのです。そ
して、どんなにそれがうれしいことかも、
よくわかっていたにちがいありません。と
ころが、チューリップは、まえよりも、い
っそうそり身になり、まっかになつて顔を
とんがらせていました。すっかり腹をたて
ていたのです。シャクヤクときたら、まっ
たく、うすのろですよ。まったく！ 口が

きけなくてさいわいでした。さもないと、ヒナギクはたっぷりお説教をきかされたことでしょう。あわれな小さい花には、みんなのきげんがよくないことが、わかりました。そのため、心をいためていました。

そのとき、庭の中へ、ひとりの少女が、ピカピカ光っている、よく切れそうな大きなナイフをもって、はいってきました。少女は、つかつかとチューリップのなかにはいって、一本また一本と切りました。「ああ！」と小さいヒナギクはためいきをつきました。

「おそろしいこと！ もうあの花はおしまいだわ！」

少女は、チューリップをもっていってしまいました。ヒナギクは、じぶんが庭のそのの草のなかにいる、小さい美しい花であることを、うれしく思いました。そして、ほんとうにありがたいことと思っていました。やがて、お日さまがしずみますと、ヒナギクは花びらをたたんで眠りました。そして、ひと晩じゅう、お日さまのことや、小鳥のことを夢にみていました。

あくる朝、ヒナギクはふたたび幸福そうに、白い花びらを小さい腕のように、朝の空気と光のなかに思いきりのばしました。そのとき、ききおぼえのあるヒバリの声がきこえました。けれども、けさの歌はそれは悲しげでした。そうなんです！ そのわけは、あわれなヒバリにはじゅうぶんあったのです。というのは、ヒバリはとらえられて、ひらいた窓ぎわの鳥かごの中にいたのですから。その歌は、自由に幸福にあたりを飛びまわりたいことや、畑の新緑のムギのことや、つばさにのって空高く飛ぶ楽しい旅のことなどでした。あわれな小鳥は、元氣なく、鳥かごの中に、とらわれの身となっていました。

小さいヒナギクは、どうかしてヒバリをたすけてあげたいと思いました。けれども、それには、どうしたらいいでしょう？ うまくやるなんてことは、容易ではありません。ヒナギクは、まわりのものがすべてどんなに美しいかということも、お日さまがどんなにあたかく照っているかということも、じぶんの花びらが、どんなに美しくまっ白に見えるかということも、みんなわすれてしまいました。ただ、とらわれの小鳥のことはばかり考えていました。でも、そのために、何もしてあげることができませんでした。

そのとき、小さい男の子がふたり、庭から出てきました。そのうちのひとり、きのう少女がチューリップを切るためにもっていたのと同じ大きさのするどいナイフを手にしていました。ふたりはツカツカと小さいヒナギクのところへやってきました。いったい、どうしようというのか、ヒナギクには、さっぱり、けんとうがつきませんでした。

「このきれいな芝生を、ヒバリに切りとってやろうよ。」と、ひとりがいいました。そして、ヒナギクのまわりを、四角に深く切りはじめました。そのため、ヒナギクはその芝生のまん中に立つようになりました。「こんな花、ひっこぬいてしまえ。」と、もうひとりの男の子がいました。ヒナギクは、こわくてブルブルふるえました。引きぬかれたらさいご、もう命はありません。でも、ヒナギクは、いまこそどうかして生きていたいなと思いました。なぜなら、この芝生といっしょに、鳥かごの中の、とらわれのヒバリのところへいけそうに思えたからです。

「いや、そのままにしておこうよ。」と、まへの男の子がいました。「こんなにきれいに咲いてるもの。」

こうして、ヒナギクはそのまま芝生といっしょに、鳥かごの中のヒバリのところへやってきました。

あわれなヒバリは、失った自由を大声になげき悲しんで、つばさを鳥かごの針金にばたばた打ちつけていました。小さいヒナギクはものがいいないので、どんなにいいたいと思っても、なぐさめのことを、ただのひとことも、いうことができませんでした。こんなふうにして、午前ちゆうはすぎました。

「ここには水がちつともない。」と、とらわれのヒバリはいいました。「みんな外に出て、ぼくに一しずくの水さえ飲ますのをわすれてしまったんだ。のどがカラカラで、焼けつくようだ。ぼくのなかは、火と氷だけだ。それに、この空気のおもくるしいこと！ ああ、ぼくは死ななければならぬんだ。このあたたかいお日さまから、このすがすがしいみどりの草から、神さまのおつくりになったあらゆる美しいものから！」
 こういいながらも、すこしでも元氣をつけようと、つめたい芝生の中へ小さいクチバシを突きさしました。そのとき、ヒナギクに目がとまりました。ヒバリはうなずいて、クチバシでキスをしていいました。

「きみも、このなかでしぼんでしまふんだね。かわいそうな小さい花くん！ きみと、このちつぽけなみどりの芝生はね、ぼくが外でもついていた全世界のかわりに、ぼくにくれたんだよ。この小さな草の葉の一枚をみどりの木と思ひ、きみの白い花びらの一枚一枚を、かおりのよい花と思ひというつもりなのさ。ああ、きみたちは要するに、ぼくが、どんなに多くのものを失ったかということ、語るだけだよ。」

「どうしたら、このかたをなぐさめてあげることができるかしらん？」と、ヒナギクは考えました。けれども、花びら一枚動かすことはできませんでした。ただ、きよらかな花びらから流れ出るかおりは、